

メータオ・クリニック支援の会（JAM） 会報メール 第56号 〔2013年10月号〕

メータオ・クリニック支援の会（JAM）支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。
JAM 会報メール第56号をお送りします。

JAM は2008年3月に発足されたNGOです。ビルマ／ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へJAMの最新の活動をほぼ毎月中～下旬ごろ会報メールにて発信いたします。
今後ともどうぞよろしく願いいたします。

<目次> [ページ]

平成25年度活動報告会開催のご報告

グローバルフェスタのご報告

メソトマンスリー

国内から

- ・ アメリカ式の医学教育

編集後記

次号の予定



平成25年度活動報告会開催のご報告

去る9月8日(日)、平成25年度活動報告会を開催しました。26名の皆様にご参加いただき、遠方からは愛知県、福島県、山梨県からお越しいただきまして、スタッフ一同、心より御礼申し上げます。

現地活動報告では、田畑から「タイ社会の中で —ミャンマー／ビルマ移民学校、平和と友好の音楽交流会—」と題して報告しました。その中で、音楽を用いた心のケアへの支援について、特に参加者の皆様からの関心が高かったように感じられました。アンケートに「心身両面の支援において JAM が重要な位置付けにあることが分かりました」とのご感想をいただきました。

また、前川は、「変わり行くミャンマー／ビルマと国境の人々」の報告にて、昨年度、財政難に陥ったクリニックがやむを得ず断行した、職員数および給与の削減により窮地に立たされたクリニックスタッフの厳しい現実を、傍で寄り添い見つめてきた立場から語りました。自分にできることは何かを考え続け、最後に行きついた思い、『日本人だから出来ること』に「言葉の重さを感じました。」とアンケートでご感想をいただきました。

報告会、懇親会ともに JAMらしいアットホームな会となり、皆様からの温かいご支援に支えられていることをあらためて感じられた一日となりました。

活動報告会は年に一度開催しております。今年お越しになれなかった方も、ぜひ来年お待ちしております。

当日配布しました、平成24年度事業報告および会計報告はホームページに掲載しております。ぜひ、ご覧ください。(<http://japanmaetao.org/>)



開会のあいさつを行う小林代表



今年度スタディツアーの実施報告をする
JAMスタッフ 神谷



現地活動報告をする現地派遣員 前川
※今回の帰国を持ちまして任期を終了しました。



現地活動報告をする現地派遣員 田畑





JAM スタッフ

左から 鈴木（司会）、田畑、菊池、
菊池（現在は賛助会員）、荒木



会場の様子

グローバルフェスタのご報告

10月5日（土）～10月6日（日）に日比谷公園にてグローバルフェスタが開催されました。

メータオ・クリニック支援の会（JAM）も昨年に引き続き出展し、民芸品の販売をしました。

土曜日は、雨で寒いお天気だったので立ち寄ってくれる人もまばらだったのですが、日曜日は、晴れだったのでにぎわいました。

お越しいただいた皆様、ボランティアでご協力をしていただいた皆様、本当にありがとうございました。



メソトマンスリー



2年間の想いと続く夢。

【メソト＝前川 由佳】

2年前の2011年7月、JAMの現地派遣員としてメータオ・クリニックでの活動が始まりました。



した。

JAMの現地派遣員で、看護師で、国際ボランティアで、何かできることをするんだという気持ちで意気込んで現地入りしたものの、そこには限られた環境でもできる限りのことを精一杯やり続けるスタッフたちがたくさんいて逆に教えられることばかりでした。それでも“セアマゆか(ゆか先生)”と受け入れてくれるスタッフたちの優しさに支えられて少しずつ自分にできそうなことをスタッフと一緒に探し共に行っていきました。きっと当時の国際ボランティアの中で一番長く、そして近くでスタッフたちと時間を過ごしていたと思います。

そうした時間の中で、みんなが話してくれた生い立ちの話、クリニックで医療に携わる想いや、医療者として村に貢献したいという気持ち、母国を、故郷の村を想う深い気持ちを知りました。こんなにも自国を思いながら、様々な困難のあるこの場所に居ざる終えない彼らの気持ち、それを知り、できるだけ彼らの応援になることを続けていきたいと強く思うようになりました。

そして2年目、民主化への変化やクリニックの資金難が起こり、1年目に一緒に活動して支えてくれていた仲間たちが去っていきました。私やスタッフたちだけではどうにもできない大きな問題でした。

その時知ったもうひとつのできること、それは日本人として私たちにできることです。

シンシア医師来日の際には、応援してくれる沢山の方々に出会い、多くのご支援と日本の力をもらいました。メータオ・クリニックを知ってくれたたくさんの方々からクリニックを訪問してくれました。自分ひとりではできなかった沢山の力が国境へと届き日本からの支援として形になっていきました。

この2年間を通して私の中で確固たるものになった2つの想いがあります。

ひとつは、支援や助けとなるものはすべて地域の人々、そこにいる人々のためになり彼らが中心になるべきものとなること。メータオを知り始めて知ったCBO(Community Based Organization)という言葉。地域自治組織と訳されていたその言葉を赴任前はあまり理解していませんでした。

現地でこの言葉を聞くにつれて、そしてそこにいる人々と共に過ごすにつれて、そこにいる人々の想いに勝るものはないことに気づきました。だからこそ彼らが中心にならなければいけないのだと。

もうひとつは、自分でできることだけではなく、日本人として私たちにできることを考えていくことです。赴任当初は国際ボランティアであり、看護師であり、JAM現地スタッフの私としてできることを探し続けていました。しかし、人ひとりではできることには必ず限りがあります。人ひとりではできることで比べれば、言葉の壁もなく長年そこで活動してきたローカルの人々のほうがずっとできることがあると思います。では、なんでそこに私が必要なのか、そのひとつの意味は日本人として日本と国境、メータオ・クリニックをつなげることにあるのだと感じました。

世界のどこかで支援を必要とする人々のために活動する。このひとつの夢から始まったメータオでの日々は、新たな目標の始まりとなりました。

メータオ・クリニックで支援を必要とする国境の人々のために活動すること。

これからは少し場所を変えて、少数民族地域の医療現状を知るための活動を続けていきます。しかし、その根底にある思いは地域の人々を中心とした医療支援を、メータオ・クリニックの力を巻き込み進めていくこと、です。そしてそこに日本の支援を届けるように、この2年に培った信念をもってこれからも前進していきます。



最後になりましたが、メータオでの2年間を支えてくださった日本のご支援者のみなさま、現地で出会い応援してくれたみなさま、そしていつも見守ってくれていたJAMのみんな、本当にありがとうございました。この2年間の経験と想いを絶やさぬよう、今後も歩み続けていきます。



Happy Mural Paint@ Hope School - 壁に絵を描こう！その2 -

【メソト＝田畑 彩生】

Hope 校の壁画の完成が近づいています。



【写真1；手洗いの絵が描かれた校舎】

手洗いの手順が壁に描かれ、子どもたちは喜んで正しい手順で丁寧に手を洗う様になりました。



【写真2；生徒の女の子が手洗い中】

壁に大きく描かれた目標の樹へ書き込むスローガンを、学校の先生と生徒たちで考えています。

敷島製パン労働組合様のご支援により整地され、整備された校庭には、手作りの運動場が出来ました。





【写真3；手作りの校庭で遊んでいる男の子たち】

元気いっぱい運動場で遊ぶ子どもたちは、皆でボールを追いかけます。

「学校を綺麗に保ちたいから。」と高学年の学生数名が大きな竹箒をもって、校庭を掃除していました。学校が主導して、コミュニティーとの連携を密に保ち、学校の環境改善に努めたいとし、地域と学校関係者の会議が毎月開かれています。



【写真4；子どもたちと田畑】

学校の環境を整える事、これは子どもたちの笑顔がうまれるだけではなく、地域住民の学校への愛着、教師の指導意欲の向上、学生の学習意欲の向上、清潔意識の向上につながるこの目で実感する変化でした。



【写真5；手洗い場の前で子どもたちがポーズ】

第5回学校保健評価では今年、銀賞が6校、銅賞が9校の入賞を果たしました。今年初めて銅賞に入賞する事が出来た Hope 校、「この調子で、来年は、学校保健評価では金賞を目指します。」と校長先生の眼差しは、光ります。



【東京＝渡邊 稔之】

国内から

アメリカ式の医学教育

今年の4・5月、私は大学からの派遣学生として、アメリカのハーバード大学医学部(Harvard Medical School、HMS)関連病院で病院実習をさせていただきました。

私は今までフィリピンやタイ(メーソット)に1、2週間ずつくらい滞在したことがあったものの、帰国子女でもなく、英語圏に留学するのは初めてなのにいきなりマサチューセッツ総合病院という最先端の大病院の脳神経外科に飛び込むことになってしまいました。

アメリカの医学教育はすごいという前評判を聞いていたのですが、以下は私がいちばん衝撃を受けたティーチング・セッションについてお話しさせていただきます。

脳神経外科での実習が始まった初日、秘書さんから手渡されたのは、脳神経外科に所属する教員と連絡先、各々の専門分野のリストでした。

例えば、A教授は脳卒中、B教授は脳腫瘍、といった具合です。そして、「それぞれの先生のオフィスに直接電話して、ティーチング・セッションの約束を取り付けたら」と指示されました。そこで他の2人の学生と分担し、教員のオフィスに勇気を出して電話をかけまくり、何日の何時からという約束をたくさん取り付けました。全ての先生が快くセッションを引き受けてくださいました。

さて、私の大学の病院実習でも「クルズス」とか「ミニレクチャー」と呼ばれる少人数教育がありますが、教員の先生がパワーポイントを持参して、テーマに沿って少人数講義をする形式が普通です。ですから、私はティーチング・セッションも同じような感じなのだろうと思って、大して準備もせずに教員のオフィスを訪れました。すると、いきなり衝撃を受けました。

「じゃあ、君。58歳の男性が、突然今まで経験したことのないような激しい頭痛を感じたと言って、外来に来た。どのような病気が考えられるか」

「じゃあ次の君、くも膜下出血の原因を述べなさい」

「治療法にはどのような選択肢があるか」

「その選択について、何か根拠となる研究を知っているか」

…啞然としました。

受動的な講義なんかじゃない、双方向の、「口頭試問」方式でした。緊張感が違います。

私が教科書を開こうとすると、

「教科書を見てはいけない。将来、何科の医師になるにしても、これは頭に入れておかない



といけないことだよ」

と言われました。

初回のセッションで懲りた私は、二回目以降は前日に教科書を必死に読み、6時間以上予習に費やすようになりました。しかし、それでも答えられない質問が出てくるのです。

日本の教育では、学生は主に知識を提供されますが、アメリカ式の教育では、主に質問を提供されます。予習知識を元にその場で考え、すぐに自分なりの答えを述べるのが求められます。予習は前提であり、セッションは予習してきた知識を臨床で役に立つ形に変換する場なのでしょう。

別に質問に全然答えられなくても、むしろセッションをサボったとしても、誰からも何も言われません。しかし、予習していなくて何も答えられないのは自分が惨めだし（それではセッションに参加する意味がありません）、サボるのは学習機会を自ら捨てることと同義です。セッションは強制・義務ではなく、高い学費を払い、脳神経外科を選択した学生だけが受ける権利を得られるものなのです。

日本では、一部の医師にとって教育は「仕事の片手間ですること」で、教育するのが面倒くさそうな教員もおり、学生は学生で、早く帰って部活やバイトに行きたいと思っている人もいます。しかし、HMSでは、教員は学生のセッションのために手術を早めに抜け出してきて、手術着のまま嫌な顔一つせず教えてくれました。教員にとって、教育することは紛れもなく仕事の一部なのです。

私が実習させていただいた2つの病院には、誇らしげに「この病院は、ハーバード大学医学部の”教育病院”である」と掲げてありました。なるほど…と思いました。

編集後記

先日、宮崎県にある高千穂峽に行ってきました。

11時に着いたのにボートは、4時間待ちと言われ、困ってしまいましたが、せっかくここまで来たんだからと待ちました。無事にボートに乗ったのですが、待ったかいがあつてとってもきれいな景色でした。滝が至近距離。

みんなボートに慣れてなくて思うように進まず、オタオタ。衝突事故多数。

ボートを上手に漕げなくて滝のほうにむかってしまい、ずぶぬれになっている大学生くらいのカップルがいました。。

あわわ。

あの人たち、ボート降りてから喧嘩してないといいな・・・と、余計な心配をしてしまいました。



高千穂峽にお出かけの際は、事前に上野公園などの池でボートの練習をしておくことをおすすめします。



